

ロータリーをシンプルにした 年次大会の成果を顧みる

福岡西 梶原 景親

年次大会の経費を、参加ロータリアンの登録料と、地区会員1人一率負担金（当地区では1,500円）だけで賄いたい、というのは日本全国各地で、かねて理想的な大会運営方式と考えられていると聞いているが1973年度当地区福岡大会では、その理想的運営がほぼ実現したのではないかと思う。「ロータリーをシンプルに」との趣意から大会を簡素に、しかし内容は充実したものに、これが清島ガバナーの指示となった。簡素にとは、華麗を避けて冗費を節約し、逐年増大傾向にある大会経費を節減し、関係クラブに多額の特別負担金をかけないよりにということである。過去の例を見ると関係クラブ会員の特別負担金は、3万、5万と殖えつづけ、外部から寄付金を仰ぐ事例もあったのである。

年次大会のホストに指名されたクラブが、クラブの名誉にかけて大会構成の盛況を競うことは当然であろう。そのための必要経費をロータリアンが出し渋るようなこともあるまい。しかしながら大会の盛況を思う余り、豪華なるセレモニー、華麗なる大会構成とはなったが、ロータリー的内容に乏しい大会に終ることもある。このままではやがてロータリーの本質に背反するような結果に陥ることにもなりかねない、ガバナーの杞憂されたところであろう。

経費節減の幾つかの要因を挙げれば、先ずホスト、コホスト会員の労力奉仕である。準備の時期から大会当日まで、各種各様の雑役労働はすべてロータリアンの手で行なわれた。例えば大会登録袋には、ガイドブックなどの多種類品物を詰め合わせる

訳だが、このため30名以上のロータリアンが手狭の大会事務所で和気あいあいとして作業することもあった。事務所の女子事務員などは、重役や社長さんが新入社員のような仕事をしてはしゃいでいる、これがロータリーというものですか、と感心したり呆れたりしたこともあった。物心両面におけるロータリアンの奉仕は枚挙にいとまがない。

約1カ年間に亘る準備期間中には、各担当委員会は度々会議を開いたが、この種の会合がとかく飲み喰いになる例が多い中で今回の場合は、18セクションの委員会の使った会議費が僅少1万円足らずで賄なわれた。何時の会合でもお茶だけで無費用というのが普通であった。関係者のロータリーをシンプルにという意気込みが窺われる。

大会の飾りつけは、会員の中から担当者が出て、デザイン、設計すべて奉仕、極めて簡素に工夫され、付けばけしい装飾は一切廃止、頗る清潔な舞台構成となった。

従来慣習となっていた土産物廃止の決断も経費節減の大きな原因となった。

大会特別負担金は、ホスト会員1万円、コホスト5,000円の取りきめであったが、大会経費精算の結果3分の1は払い戻されることとなり、ロータリーをシンプルに、という清島ガバナーの要請に応えることができた。

さて、そのようなケチケチ大会で、内容は充実していたのか、ということであるが、この点については当事者として、大言壮語する訳にいかない。しかし東ヶ崎潔 RI 会長代理のご講評によれば、われわれ関係者としては望外とも思われる最大級の讃辞を頂戴したことで満足している次第である。大会に花を添えた余興は、ロータリーソングに振り付けした博多芸妓の群舞が、僅少な謝礼金で奉仕的に披露され、絶讃を博したことを付け加えたい。